

【2016「前期」報告書ーリゾート地の裏の生活状況ー】

リゾート地の裏の生活状況調査

中村南美

1、動機

きっかけはバリ島に行ったときだった。バリ島と聞けば誰もが海のきれいなリゾート地を思い浮かべるであろう。もちろん私もそのイメージを持って出発した。しかし実際に行ってみると、日本では2、3日で稼げてしまうほどの低月収や物乞いをする人々など、想像とは異なった現地の人々の暮らしが見えてきた。そこでリゾート地の裏の生活状況に興味を持ちこのテーマで研究することにした。今回セブ島を選んだのは、人気のリゾート地であるとともにフィリピンの島であって貧困問題が多くある島だからだ。

2、現地での生活

8月15日から28日までの2週間フェアトレード工房に住み込みで石鹸やバック、アクセサリーなどのフェアトレード商品を作った。この工房のオーナーは日本人で、工房は貧困層の雇用を創出している。一緒に働いたのは女性1人と男性2人のフィリピン人達だった。女性はこの工房で働いて10年のベテランで、いつも私たちを助けてくれた。また男性達は工房に住み込みで働いていて、その内の1人は20代前半で3歳になる子供がいると言っていた。子供や奥さんと離れて暮らし家族のために働いているという。仕事は月曜日から土曜日の朝8時~12時と13時~17時までで1日計8時間働いた。私達はもちろん無給だが、この工房のフィリピン人たちは1日に日本円で約1000円分の給料を貰っている。この額はフィリピンの相場からすると良い方である。日本でこれだけの収入で生活するのは厳しいが、フィリピンの物価は安く日本の3分の1~4分の1程度だった。

正直なことを言うと初日はここで2週間も暮らしていけるのかという不安しかなかった。流せないトイレ、不定期的に起こる断水、エアコンのない蒸し暑い部屋、舗装されていないデコボコな道、道のあちこちに居る野良犬、全てが私にとって初めての経験だった。その暮らしはリゾート地のセブ島というイメージからかけ離れていたし、観光客の多いエリアとの格差を感じた。また、工房での労働は単調作業で長時間続けることはなかなか慣れなかった。フィリピン人はこんなに働いて1日1000円しかもらえないのか、何度もそう思ったしこれが一生続く事を考えたら気が遠くなった。



仕事中的様子



石鹸とココナッツオイル

タティングのアクセサリー



手編みのバック

3、ごみ山、スラム街での出会い

日曜日は工房が休みだったため、セブ島にあるスラム街とゴミ山に行った。スラム街の家は高床式のものが多く下にはゴミであふれていた。また家が密集しているため路地はとても入り組んでいて狭かった。家と家をつなぐ道は竹や木で出来た橋のようなもので、いつ壊れてもおかしくないような不安定な足場だった。お宅訪問をするために家を目指して歩いている途中、なんと汚水に足がはまってしまった。困惑している私に現地の子供たちは井戸から水を汲み私の足にかけてくれた。そして石鹸を持ってきて綺麗に洗ってくれたのだ。この時の感動は忘れることができない。目的の家に着き上がらせてもらおうと、テレビや扇風機、ソファーにキッチンなど思っていた以上に家具が取り揃えられており驚いた。しかし窓がなく家の中は暗く感じた。また家族 5 人で暮らすには狭すぎる家だった。

“What your name?” ゴミ山に着くと通り過ぎる子供たちみんなが日本人にこう話しかけてきた。ここの子供たちはとても人懐っこかった。私の手を取り無邪気にはしゃいだり、急にタッチされ鬼ごっこが始まったり、一度抱っこをすると離れなかつたりした。子供たちはいつでも笑顔で元気でボランティアをしようと思っていた私が逆に勇気をもらった。ここでは現地の言葉であるビサヤ語を教えてもらったり、日本語を教えたり一緒にダンスをしたりご飯を配ったりした。



4、最後に

リゾート地と呼ばれる場所でも現地の人々の暮らしは決して恵まれているとは言えない状況だった。しかしそのようなところに住む人々はみんな明るく幸せそうだった。現地の人々の幸せの基準は3つあって、何でもいいから食べられること、家族と一緒にいられること、歌を歌えることだという。これを聞いたら日本での悩み事がちっぽけなことに思え

た。そして帰ってみてから思うこと、それは日本人がこの暮らしを当たり前だと思っていることだ。いつでも飲める透き通った水、多機能なトイレ、舗装された歩きやすい道、時間通りに来る電車、帰ったその日は全てのことに感動し感謝した。いつも当たり前だと思っていたことがどれだけ恵まれたことなのかを考えさせられた。この2週間で多くのことを学び感じ考え一回り成長できたのではないかと思う。